

勤務医部会だより

地域に根ざした一民間病院の務め



幹事 川崎晋吾
(済衆館病院 院長)

済衆館病院 院長の外科医 川崎晋吾です。当院は、1914年(大正3年)創業以来今年で111年になります。名古屋市北部に接する北名古屋市に在しまして、周囲の清須市・豊山町を含めた2市1町の地で地域に根ざした医療を行っております。

当院は、尾張のスーパーケアミックス病院として、病院規模331床(急性期108床、地域包括ケア60床、緩和ケア20床・回復期を含めた療養病床143床)・介護医療院38床(2020/10/1開院)。またセンター部門として、腎透析センター・IBDセンター・認知症疾患医療センター・心不全センター・健診ドックセンター・患者支援センター・在宅支援センター・デイケアセンター・訪問看護ステーション・北名古屋市中部地域包括支援センターとそれぞれの役割を担った病棟・部署を整備し、地域住民の皆様が離れた医療機関に赴く必要がなく、救急医療から在宅復帰の支援まで、地域内で安心して医療と介護を受けていただけるような病院をめざして、今日に至っております。

さて、昨今の厳しい経営環境は当院でも例外なく、毎月行われる企画運営会議で明らかとなる事業実績の経常損益を見ても、コロナ禍以降ずっと寂しい結果が続いております。働き方改革による人件費の増加、IT化、光熱費や材料・物品費・食材費の高騰などによるコスト増は、高いインフレ率を反映して診療報酬のわずかな増収分では到底賄えないレベルです。とはいえ当院でも、様々な収益改善への対応策を取っております。しかし結局のところ対応策としては、①新規入院患者数を増やし入院稼働率を上げる。②入院単価を増やす。③手術数を増やす。の3点に集約されます。手術につきましては、眼科や整形外科関連の手術は、住民の高齢化に伴い需要が増加しており、今後も担当医師のご尽力もあり手術件数の増加の余地は十分あると思われます。しかし私が担当する消化器外科手術件数は、悪性疾患につい

ては患者の高次医療機関受診希望傾向の影響は否めず、胃癌の著明な減少、大腸癌はほぼ維持しているが高齢化が著明。胆石胆嚢炎、鼠径ヘルニア、急性虫垂炎などコンスタントにはあるが、増加が望めるものではありません。院長とはいえ消化器外科医の一人である私にとっては、なかなか手術件数が増えず、正直肩身の狭い思いであります。

最後に、我が国では今後の人口減少は避けられず、それに伴って医療需要も減少していくことは当然なことで、医療業界経営は益々厳しい状況となっております。一方、今年は2025年問題(団塊世代が全て75歳以上の後期高齢者となる)の真っ只中です。医療業界だけでなく、国民の生活にも様々な不安がある我が国ですが、せめてこの地域の高齢者の方々が安心して医療・療養・介護・在宅療養を受けていただけるようにすることが、地域に根ざした済衆館病院の務めであり、一民間病院が生き残っていく道であると思います。今年で当院創業111年を迎えます。創業時の「済衆の心」、すなわち多くの人々を救いたいという精神を思い起こし、地域医療に貢献できるように尚一層の努力を図ってまいります。